

谷崎潤一郎の母 —— その否定的側面をめぐって

細江 光

従来の谷崎研究では、潤一郎は母セキに対して良い感情を抱いていたと、単純に信じられているケースが多かった。それに對して私は、そこに近親相殺的欲望と罪の恐怖のアンビヴァレンツを見出し、その原因をインセスト・タブーによつて説明して来た。

しかし、研究を進めるにつれて、谷崎には、なおそれだけでは充分説明の付かない現象（後述するベシミズム・攻撃性・捨てられ不安・クラインの妄想分裂態勢など）がある事に気が付くようになった。そこで、本論では、潤一郎は、乳児期に既に母の愛を失つたと感じ、恨みから来る攻撃性と、絶望から来るベシミズムと、母にまた捨てられるのではないかという捨てられ不安を、生涯にわたつて持ち続けていたという仮説を立て、以下、この立場から、論旨を進めて行きたいと思う。

一、幼少期の母子関係

野口武彦氏は、その『谷崎潤一郎論』で、潤一郎がセキと死別したのが三十二歳の時であるのに対して、作中の少年が母を失うのが、決まって四く六歳ぐらいの時である事に着目し、それは、弟の精二が生まれた為、潤一郎が母を独占できなくなつた時期に当たるとした。この論は、潤一郎が早期に母を喪失した事を指摘したという点で、極めて重要なものであるが、精二誕生以前に幸福な母子関係が成り立っていたとした点に、私は疑問を持つのである。

疑う理由は数々あるが、例えば、幼少期の潤一郎に暴力性が見られるのは何故なのか。

創作ではあるが、『恋を知る頃』『憎念』などによれば、潤一郎自身を思わせる主人公の少年たちは（前者は十二三歳以前から、後者は七八歳以降。なお、年齢は以下も数え年とする）、奉公人を憎んだり、暴力を振るったりしており、これが単なるフィクションでない事は、『幼少時代』に、七歳の時既に『手に負へない腕白坊主の徒ら者』『悪い子供』『奉公人泣かせ』だったとある事や、『幼年の記憶』に、精養軒に書生に行くまでは、（あばれん坊で親に心配ばかりかけてるで、父親とも、母親とも始終喧嘩ばかりしてゐた）（傍線引用者・以下も同様）とある事から判る。また、『うろおぼえ』『母を恋ふる記』『恋を知る頃』からは、潤一郎が九歳以前から乳母に暴力を振るっていた事が窺い知られる。

また、『親不孝の思ひ出』の中では、小学校時代の思い出として、親不孝者という苛責の念を絶えず感じていた事、『親たち』からしばしば「親に桶をつく」などと非難されていた事、友達が親に大切にされるのを見て羨んだ事、などが挙げられている。

幼少期の子供が、この様な暴力や反抗を示すのは、余程強い欲求不満がある場合だけであろう。そして、こうした傾向が、九歳で一家が零落する以前から現われている点から見て、原因

は父母との関係にあるとしか考えられない。

野口氏の言う精二誕生は、潤一郎五歳の年末であるが、それまで潤一郎が母に愛されていたとすれば、精二が生まれたからと言って、俄に冷たくされたとは考えにくい。また、愛され続けてはいたが、母を独占できなくなったからだと、とするには、潤一郎の反応が強過ぎ、長く続き過ぎるという疑問が残る。むしろ、潤一郎は、精二誕生以前から既に母の愛を失ったと感じており、その外傷に加えて、精二の誕生や一家の経済的没落が重なった事で、欲求不満が強められ、こうした形で現われたと見る方が自然ではないだろうか。

ただし、母の愛を失ったと言っても、恐らくセキは、潤一郎を愛さなかつた訳ではなく、ただ、乳母に任せ過ぎた為に、潤一郎の無意識には、その様な印象が焼き付けられてしまった、というのが真相なのではないだろうか。

『幼少時代』によれば、潤一郎は、ごく小さい時、少なくとも五歳の時には既に、夜は乳母と一緒に寝るようにつけられており、両親の寝室については何処にあったかすら覚えがないし、潤一郎の最も古い記憶も乳母に関するものかも知れないと言ふ。また、『幼少時代』および『幼少時代の食べ物の思ひ出』によれば、四五歳の頃、潤一郎は自分専用の小さなお膳に向か

って、乳母にお給仕をして貰って、一人で食事をしていた。傍に母は居なかつたのである。また、『少年の記憶』によれば、五六歳の頃には毎日のように乳母に連れられて、人形町界限を遊び回った。『幼少時代』によれば、幼稚園も、小学校も一年目までは乳母が付いて行つた。

乳母のみよは、『うろおぼえ』によれば、潤一郎が生まれた翌日から付けられていた。恐らく潤一郎は、生まれてから七歳頃まで、殆ど一日中、乳母と共に過していたのであって、母との結び付きは極めて不十分だつたと推定されるのである。

『幼少時代』によれば、潤一郎が五歳前後の頃、父母は夏にはしばしば大磯に出掛けた。(『幼年の記憶』では、『随分長いこと行つてゐ』たとする。)その際、潤一郎はいつも乳母と置いてき堀にされていたが、それでも潤一郎は『駄々を捏ねたり後を慕つたりしなかつた』と言う。ところが、その潤一郎は、道で『ほんのちよつとの間でもばあやを見失ふことがあると、忽ち大声を挙げて喚く』ような子供であつた。幼稚園でも小学校の一年目も、乳母が傍に居ないと耐えられなかつた。この事から、潤一郎が母が居ない事に耐えられたのは、それだけ母との結び付きが弱くなつていたからであり、乳母が傍に居ないと耐えられなかつたのは、極めて早い時期に母を失つていたから

だと考えられる。乳母は失われた母の代わりであつたからこそ、それだけ一層強くしがみついていなければ不安でならなかつたのであろう。

潤一郎にとって、母より乳母の方が重要な保護者だつた事は、『恋を知る頃』からも窺える。即ち、十三歳の少年・伸太郎は、乳母・おしげが家を空けた夜を狙つて殺される。伸太郎を守るのは母ではなかつたからである。また、伸太郎はおきんに恋し、『お前が居れば、おしげなんぞ居なくつてもいゝよ』と言うが、ここでも選択は乳母か恋人かであつて、母は問題にもされていないのである。

しかし、いくら乳母が傍に居てくれても、母を失つた淋しさや不安を完全に埋め合わせる事は出来ない。『生れた家』には、潤一郎が五歳の頃まで住んでいた新設町の家の思い出として、夜、乳母と一緒に寝ながら新内流しの三味線を聞いた時、両親は『いつまでも私を可愛がつてくれるだらうか』(中略)奉公にやられるのぢやないだらうか』(中略)ばあやが、若し死ぬやうな事があつたら』などと考えた事が記されている。『幼少時代』にも、南茅場町四十五番地時代(潤一郎六〜八歳)の事として、歌舞伎座の煽りに、『自分の母も忠義のためや貞節のためには私を捨てたり殺させたりすることがあるだらうか、な

どと考へた事が記されている。母の愛に安心している子供なら、この様な不安を抱く事はなかつた筈であらう。

小説ではあるが、『アエ・マリア』では、主人公が五六歳の頃、人形遊びをした思い出を語つた後、「私はどんなにその白い人形のおかげで、幼い頃の孤独な月日を慰めたらう。ほんとに随病で神経質な子供だった私は、またその時分は友達もなし兄弟もなかつたので、その白い人形を自分の唯一の味方とも思」つたと言う。フィクションが含まれているとしても、この孤独感だけは、当時の谷崎自身のもののように、私には思えるのである。

二、谷崎文学における分裂と投影の傾向

以上は、潤一郎が幼児期に、母に愛されない淋しきや不安を感じていた事を示すに足る資料と思う。が、潤一郎が心に傷を受けた時期については、依然として議論の分かれる所であらう。そこで、もう一つの傍証として、メラニー・クラインの精神分析学説を取り上げたい。

クラインによれば、誕生から生後三四ヶ月までの乳児は、「妄想的・分裂的態勢」と呼ばれる原始的な心のメカニズムを持つ

ている。例えばこの時期の乳児は、母の乳房が自分を満足させてくれる時には良い乳房と認識して愛を感じ、そうでない時には悪い乳房と認識して憎しみを感じる。そして、乳児は良い乳房だけを極度に理想化して受け容れ、悪い乳房のイメージや憎しみは、まだ適切に処理できない為に、心の中から押し出し、外界に投影する。するとそれは、恐ろしい迫害者のイメージを帯びる。三四ヶ月頃を過ぎると、乳児は良い乳房も悪い乳房も同じ一人の母の一面である事を次第に理解するようになり（これを「抑鬱的態勢」と呼ぶ）、アンビヴァレントな対象を善悪両極に分割し、悪を外界に投影するという妄想的・分裂的メカニズムは、次第に他の高次な心のメカニズムに取って代わられるが、完全に消滅する事はない。

興味深い事に、『アエ・マリア』の主人公は、五六歳の頃、赤い人形と白い人形に相撲を取らせ、赤（最初は白）を非常に憎み、白が勝つと、「恰も自分が憎い敵にでも打ち勝つたやうな喜びを覚え」たと言う。

『憎念』の主人公もまた、七つ八つの頃から、「新参の女中が見えたと自分其の女が馬鹿に気に入つて、今まで可愛がつて居た古参の女中を憎み出す。（中略）私には気に入つた女中と同様に、憎らしい女中の存在が必要でした。」と語っている。

これらの例で、人形や女中には、明らかに良い乳房・悪い乳房が投影されている。それは、潤一郎が幼少期に悪い乳房（母に対する不満）をしばしば感じられていた事と、潤一郎の精神構造の中で、「妄想的・分裂的態勢」が後年まで強く働いていた事を示すものである。また、本来なら良い乳房と見なされる管の母が、その役割を果たし得ていなかった事も、ここから窺われるのである。

こうした「妄想的・分裂的態勢」は、谷崎の、特に日本回帰以前の作品に、顕著に見られる。女性の登場人物の場合には、善悪（また美醜・強弱）の両極端に分類されつつ一対を成し、分身的な繋がりを持っている例が殊に多い（『金と銀』『痴人の愛』など）。これは、これらが谷崎の内なる善と悪、また良い乳房と悪い乳房のイメージを別々に投影したもので、もとは一つだからであろう。

日本回帰後は、分裂が目立たなくなり、その代わりに、一見善良そうな女性の内にも、悪性が潜んでいるというモチーフが好まれるようになる（『正宗白鳥氏の批評を読んで』や『細雪』『少将滋幹の母』『鏡』『夢の浮橋』『瘋癲老人日記』など）が、これは、谷崎の人格的な成熟によって、善悪を統合する「抑鬱的態勢」が優勢になった為と解釈される。

男性主人公の場合も、日本回帰以前には、善悪（美醜・強弱）に分裂しつつ、友人だったりライバルだったり（『金と銀』『AとBの話』『愛すればこそ』など）と、分身的な繋がりが見られる場合が見られる。また、二重人格を扱った『友田と松永の話』を初めとして、同一人物が自己分裂的な葛藤を示す例も少なくない。谷崎のマゾヒズムも、強者たらんとする気持と弱い幼児に戻りたい願望との葛藤に関係がある。これらは、「妄想的・分裂的態勢」の現われであると共に、若き日の谷崎が、弱い父・倉五郎から引き継いだ自己イメージと戦って、強い自己を確立しようとした結果でもある。日本回帰は、こうした分裂が、中年期に入ると共に緩和され、弱者としての自己を甘んじて受け容れる事が出来るようになった為と解釈される。

なお、この様な善悪の分裂から統合への発展は、例えば夏目漱石にも顕著に見られ、初期には善玉悪玉がはっきり分裂していた（『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『虞美人草』など）のが、『坑夫』『三四郎』『それから』辺りから、同じ一人の人間（作者の分身と見られる主人公でさえも）が、その時々善悪両面を示すという理解に発展して行く。これは、漱石も谷崎同様、極めて幼い時期に、母性喪失を体験した為であろう。

また、投影に関して言えば、谷崎の臆病と地震恐怖症は、悪

しき乳房を外界に投影した結果、外界に恐ろしい迫害者を見る傾向の現われてあり、神経衰弱的な鉄道恐怖や、病氣や死に対する妄想的な恐怖感、外界の迫害者を再び内部に取り込む「取り入れ」という逆の投影の結果、自分の内部に死を招く危険なものが入り込んでいると考える為と解釈される。(漱石の場合には、外界に恐ろしい迫害者を見る被害妄想が甚だしい。)

その他、谷崎の作中には、理想女性に自己を投影して分身と見なす男性主人公の例が多い(『刺青』『痴人の愛』『少将滋幹の母』など)。男性に対しても、実生活において、佐藤春夫を自分と同一視して千代子を譲渡したケースや、作中で父が息子を自分と同一視するケース(『盛烈』『夢の浮橋』)などがある。また、『恐怖時代』『敵人』『乱菊物語』『武州公秘話』『少将滋幹の母』など、多数の男性が登場する作品では、主要な人物の多くが谷崎自身のいろんな側面の投影であったりする。『恋を知る頃』『恐怖時代』『お謎殺し』『或る少年の怯れ』『痴人の愛』『正』『黒白』『乱菊物語』『鍵』など、周りの人々が共犯・陰謀関係にあるというストーリーも、谷崎の内なる敵意・攻撃性を、周囲に投影したものと言えよう。

谷崎文学における分裂と投影の傾向は、これまで西洋の分身小説の模倣や単なる悪趣味、或いは一時期の谷崎が作意を誇張

し過ぎて陥った技術的失敗例などとして受け取られがちだが、本当は、潤一郎が精二誕生以前の乳児期に母から心的外傷を受け、精神構造に「妄想的・分裂的態勢」を強く残していた事が真の原因であって、谷崎としては自分の実感に即した作品だったと想像される。それらが幼稚な印象を与えるのも、「妄想的・分裂的態勢」が、もともと乳児的な精神構造だからであらう。

三、その他の疑問点

以上、主として幼少期の母子関係を見て来たが、中学以後についても、潤一郎と母との関係は、格別良いものだったとは思われない。

例えば潤一郎は、十七歳で親元を離れ、住込みの書生になり、続いて一高の寮に入るが、寮を出た後も、友人の家を泊り歩くなどして家に居着かず、結婚に際しても、長男であるにもかかわらず両親とは別居し、結局、母が死ぬまでの十五年間、同じ家に住む事は余りなかった。これは、潤一郎が無意識に母を避けていた為と考えられるが、その原因は、インセスト・タブーの他に、母に愛されなかった恨みもあったのではないだろうか。『親不孝の思ひ出』では、両親が精二の方に親しみを感じて

いる事に対する僻みもあつたと述べていて、この頃、自分は愛されていないと感じていた事が判るが、本当は乳児期からそう感じていたに違いない。

潤一郎は、大学生の頃にも、「遊びに行く金を出せ」と言つて、母を泣かせたりした。大正一〜三年頃は、家を《飛び出したきりめつたに寄り着いたことがなく、たまにふらりと戻つて来ることがあつても、すぐ親たちを怒らせたり泣かせたりして又ぶい」と出て行つてしまふと云ふ風で》(『親不孝の思ひ出』)、長い間姿を見せない為に、「潤一郎は死んだのではないか」と母を心配させたりした。

潤一郎は、こうした行動について、(後に私が親たちに辛く当たり、分けても父と激しく衝突するやうになつたのは、あの時分の親の仕打ちをいさゝかでも根に持つてゐて、その仕返しをしてやる心が(中略)「潜在的にもなかつた」とはつきり云ひ切る勇氣はない。)(同)と述べている。潤一郎の言う「あの時分の仕打ち」とは、一家の没落後、両親がまだ寝ている早朝に御飯炊きなどをさせられた小学生時代の仕打ちの事であるが、本当の原因は、彼も思い出す事の出来ない乳児期の仕打ちだつたのではないか。いずれにしても、母に対して復讐の気持があつた事を、潤一郎はここで認めたと行つてよいのである。

潤一郎は、母の死の前年の『父となりて』でも、自分はエゴイストで、《親兄弟に対しても甚だしく冷淡》であり、千代子と結婚したのも、両親の家が居心地が悪い為、自分の家を形作る道具の一つとしてだつたと述べている。精二の『潤一郎追憶記』によれば、セキの方も、「潤一と一緒に暮らすのは御免だよ。お父さんが亡くなつたら精二と暮らしたい。」と言つていたらしい。

潤一郎は、創作の中でも、セキが亡くなるまでは、決して優しくはしなかつた。初期の『The Affair of Two Watches』少年の記憶』、『恋を知る頃』、『神童』、『異端者の悲しみ』などには母が登場するが、全く美化していないし、母への思慕を語る事もなかつた。

以上の事から、『母を恋ふる記』以降の作中の母は、セキが死んだ後で、谷崎が自らの欲望に添う形に後から作り上げたものであつて、現実とはかなりかけ離れていてと考えた方がよい。むしろ、実際の母子関係が悪かつたからこそ、潤一郎は理想の母を作り出さずには居られなかつたのだと考える方が、自然であらう。

ところが、その様に母を理想化した母恋いものの中でさえも、主人公が母に深く愛されたと感じてゐる例はないのである。『母

を恋ふる記』では悲しい思いで夜道を一人彷徨い歩かねばならず、『吉野葛』では記憶がない程早くに母を失い、『少将滋幹の母』では父と一緒に見限られたと辭んでおり、『夢の浮橋』でも、早く亡くした上に、四五歳の頃、既に父母とは別室で乳母と寝させられていた。

また、潤一郎と母との生前の関係が良ければ、母に死なれた後も、死んだ母があの世界から自分を愛してくれているという感覚に慰められる筈であるが、その様な例は見当たらない。それどころか、『ハツサン・カンの妖術』のラストでは、死んだ母は、「お前のような悪徳の子を生んだせいで成仏できない」と潤一郎に恨み言を言う事になっている。

谷崎はまた、子供嫌いで、自らも子供を作ろうとしなかった（『父となりて』など）。これは、主にエディプス・コンプレックスのせいと考えられる。しかし、自伝的な小説『鬼の面』の主人公は、（子供の傍若無人な振舞ひを見ると、腹が立つて溜らなかつた）と述べているし、『雪後庵夜話』では、潤一郎より孫にかまける松子に対して、老いの僻みを感じると述べている。これらから想像するに、谷崎は、自身が父母への甘えを許されなかった為に、親に愛される子供たちを見ると嫉妬を感じ、それが子供嫌いの一因になっていたのではないかと考えられる

のである。

四、母性喪失に対する反応

谷崎自身が乳幼児期に母の愛を失ったと自ら感じていた事を示す資料は、ほぼ以上に尽きる。しかし、谷崎の生涯および文学には、早期の母性喪失に対する反応とでも解釈しなければ理解できないような現象が、他にも数多く現われているのである。それを以下、(一)母への固着、(二)厭世的・自閉的傾向、(三)他者への攻撃、(四)捨てられ不安、の四種に分けて見て行こう。

(一) 母への固着

精神分析学によれば、過去に重要な意味を持っていた或る人物に対してアンビヴァレントな葛藤に満ちた感情を抱き、その事が心理的な障害になっているような場合には、その人物に似た人物（或いは似た状況）に出会うことに、同じような感情・態度・ファンタジーなどを無意識の裡に繰り返してしまおうという「転移」現象が起こる。

谷崎の場合も、母に似た女性に出会う度に、それを理想の女

性と感じ、母に對したのと同様の感情・態度・ファンタジーを、その女性に對して抱いていたと考えられる。

その傍証として、谷崎の作中では、男性主人公の好きな女性のタイプが、予めはっきりと脳裡に刻み込まれているとする設定が、しばしば成されている事が挙げられる（特に『金と銀』以降、『白昼鬼話』『アエ・マリア』『肉塊』『青塚氏の話』など）。これが谷崎自身の現実を反映したものであった事は、『佐藤春夫に与へて過去半生を語る書』の中で、『ほんの仮初の情人を作るとしても、僕には予め頭の中に或る一つの影像があつて、そのイリュウジョンに當て嵌まるやうな相手でなければ（中略）手を出す氣に』なれないと述べている事からも判る。谷崎の場合、この《影像》が母に由来する事は、『女の顔』の中で、自分にとって《一番崇高な感じ》がする女性は《空想の中で》思ひ浮かべる《若い美しい》母であると語っている事などから、疑いの余地がない。

母への固着は、従来、谷崎と母の關係の良好さを証明するものと考えられて来たが、精神分析学によれば、この様な「転移」を引き起こすのは、アンビヴァレントな対象であつて、ひたすら良い關係にあつた対象ではない。谷崎の如く生涯にわたつて強く母に固着し続ける人間は、むしろそれだけ早期に取り返し

がつかない程ひどく母を喪失し、その事によって生じた心理的外傷を解決できずに反復し続けた人間であると考えるべきであろう。

谷崎の作品で、主人公の友人・家族・恋人などとの關係に、甘え・甘やかしの傾向が強く見られる事も（友人では『AとBの話』、家族では『不幸な母の話』、恋人では『痴人の愛』『春琴抄』『瘋癲老人日記』など）、潤一郎が幼児期に、母への甘えを満たし得なかつた為と考えられる。

また、谷崎が幼少時代に母と正常・良好な關係を持っていたのなら、インセストやマゾヒズム・フェティシズムなど、異常性欲の傾向を、後年、示す事もなかつた筈であらう。

異常性欲の内、例えば、女性の肉体への執着・マゾヒズム・強い女性を求める傾向などは、無力な幼児期に母性を喪失した不安感と死の恐怖感から、強い母の保護を求める幼児的メンタリティーがそのまま残つたものと理解される。また、母への固着が強過ぎて（また父・倉五郎が弱過ぎて）、エディプス期の葛藤を正常に克服できなかった事から、大人の男になれず、女性化願望やナルチシズム・幼児性が強く残つたと考えられる。

また、フェティシズムについては、精神分析学者ウイニコットの言う「移行対象」との関連も考えられる。ウイニコットに

よれば、「移行対象」とは、母親が幼児の傍に居てくれない時に想めてくれる母の代用物で、母親を思い起こさせるような特徴(匂いや感触・音など)を備えている事が多いと言う。谷崎の作中に現われるものの中では、白いもの・足・鼻・人形(仏像や彫刻も含む)・猫(『ドリス』『猫と庄造と二人のをんな』)・着物(『蘆刈』『少将滋幹の母』)・眠りに就く時の音(『母を恋ふる記』の三味線・『吉野葛』の機織り・『夢の浮橋』の添水)・甘い匂い(『母を恋ふる記』『痴人の愛』『顕現』『乱菊物語』『少将滋幹の母』『夢の浮橋』)・睡眠薬(『赤い屋根』『嶺嶺老人日記』)などは、まさに「移行対象」と言えるだろう。

潤一郎が、実生活で美衣・美食・薬品類を好んだ事も、快感を与えたり、自分を守ってくれたりするそれらのものに、母を感じていたからであろう。

谷崎にはまた、女性崇拜の傾向が強くあり、それが母に対する感情の「転移」である事は、疑いを入れない。この事も、一見、潤一郎と母との関係の良好さを示すもののように見えるが、崇拜はもともとアンビヴァレントな感情で、近付きたいという思いと同時に、近づく事への強い恐怖の念を含んでいるものである。

普通の男は、恐怖を感じさせるような女性ではなく、安心し

て対等になれる女性との恋愛を選ぶのだが、『饒太郎』『雪後庵夜話』などに明らかのように、谷崎は対等な恋愛を好まず、崇拜できる女性を求め続けていた。例えば、松子に宛てた昭和七年十月七日付け書簡を読むと、立腹して睨み付けた松子の姿に崇拜の念を極き立てられ、表面上は困って謝る風を装いながら、本心ではむしろ喜んでいる事が見て取れる。

では何故、谷崎はその様に恐ろしい女性を求めるのか? 恐らくこれは、精神分析学で言う「迫害者の理想化」という心理メカニズムが働いた為であろう。つまり潤一郎は、自分だけでなく、恐怖感を与えた母を、そのまま理想化してしまったので、冷たくされて初めて母と感じ、有り難く感じるようになってしまったのである。

この事の別の現われとして、谷崎の作品の中には、理想女性を絵・彫刻(仏像・人形、時に死体や眠った状態など)・映画の中の女性・天上のアイデアなどで表わすものがしばしば見られる。これは、一つにはフェティシズムの現われであり、また一つには、性交不能にして、インセスト・タブーを避ける必要からでもある。しかし、同時にそれらの女性像は、ただ一方的に憧れる事しか出来ない存在、話し掛けても答えない返って来ない、抱き締めても反応しない、近寄り難い拒否的な存在であり、潤

一郎に対して冷たいと感じられた母の本質を表わすものと考えられるのである。

主人公（または谷崎）を苦しめる悪女たちや、我が儘勝手な猫たちもまた、この様な意味で、谷崎にとっては明らかに一種の理想女性である。

また、昭和に入って谷崎は、先述のように、一見善良そうに見えて、悪性を潜ませた女性に心を惹かれるようになる。これは、善悪の分裂が統合された形でもあるが、本当の心を明かさないう特徴は、彫刻などと同じく、拒否的な冷たい母を表わすものであろう。

幼児期の子供は、親の方に問題がある場合でも、親は完全で、拒否されるのは自分の方が悪いからだと考ええるものである。谷崎が自分を悪人だと考える傾向やマゾヒズムの自罰衝動も、その一因はここにあろう。

(二) 厭世的・自閉的傾向

次に、厭世的・自閉的傾向としては、母に愛されなかった外傷から、世界に対して基本的に不信任感・無意味感を抱くベシミズム・ニヒリズムの他、同様にして対等な他者と愛情関係を持つ事が出来なくなった為に自己愛の段階に留まるエゴイズム・

ナルチシズムや、自由に操作できるものとしての他者だけを愛するフェティシズム、現実から背を向け空想や創作の世界へ引きこもってしまう傾向、などが数えられる。

谷崎のエゴイズム・ナルチシズム・フェティシズムについては、引例の必要もあるまい。

ベシミズムについては、谷崎は、むしろ明るく積極的な現世的享楽主義者ではないかと疑問に思われるかも知れない。しかし、谷崎の享楽主義は、現世を丸ごと肯定するものではなく、通常の人間関係・社会生活の多くを無視し、自分の氣に入った一小部分（美衣・美食・美女など）だけに過剰に執着するものである。また、享楽への極めて旺盛な意欲の陰には、自らのベシミズムや死の恐怖から逃れたいという谷崎の願望が秘められていると考えられる。

谷崎のベシミズム・ニヒリズムは、『春風秋雨録』（M36）辺りから顕著になるが、中学・高校時代には禁欲的な宗教・哲学志向の形を取り、作家となつてからは、インド・中国・ヨーロッパ・イデアの世界など、理想の別世界に憧れる傾向としても現われている。

また、谷崎の作品では、愛に恵まれない人物が主人公となり、その淋しさから逃れる事が行動の動機になっているケースが非

常に多い。これもベシミズムの現われであり、だからこそ谷崎の主人公たちは、他の価値に救いを求めず、しばしば一人の女性に、異常なまでに全力でしがみつく事になるのである。

幼少時代に母を失った孤児が主人公となっている例としては、『颯風』『人魚の嘆き』『二人の雀鬼』『或る少年の怯れ』『AとBの話』『或る罪の動機』『顕現』『乱菊物語』の赤松政村・『吉野葛』の津村・『盲目物語』の弥市・『武州公秘話』の武州公・『蘆刈』の葦間の男・『少将滋幹の母』の滋幹・『夢の浮橋』の札などがあるし、ヒロインでは、『人間が猿になつた話』『呪はれた戯曲』『鮫人』の黛薫・『乱菊物語』の胡蝶などがある。孤児ではないが、愛に恵まれない淋しい主人公の例としては、『法成寺物語』の定雲や『人面狸』の乞食、『兄弟』の兼通、『私』・『愛すればこそ』の山田・『お国と五平』の池田友之丞などがある。『金と銀』の青野は、この世の中では継子扱いされる代わり、芸術という優しい母が一層彼を不憫がって、外の人にはめったに見せない美しい国を内証で見せてくれる事になっている。

また、真の友達を持たず、孤独とされる主人公の例としては、『異端者の悲しみ』『前科者』『白昼鬼語』『アエ・マリア』『肉塊』『神と人との間』『痴人の愛』『黒白』『猫と庄造と二人のを

んな』などがあり、また、理由は特に示されないが、人生そのものを無意味・空虚・退屈などと感している主人公の例としては、『秘密』『饒太郎』『鬼の面』『魔術師』『鴛鴦』『鶴唳』などがある。

この他、例えば歴史小説では、谷崎は、敗れ去つた男たちと自己を同一視する傾向がある（『吉野葛』『盲目物語』『乱菊物語』『蘆刈』『顔世』『聞書抄』『少将滋幹の母』など）。これら一つには、谷崎自身が母の愛をめぐる競争の敗者だからでもあらう。

谷崎の自閉的傾向の現われとしては、文壇つきあいを避けていた事や、『雪後庵夜話』で、小説家の喜びとして「全く他人と没交渉で仕事が出来、自分だけの世界に閉ち籠つてゐられる有難さ」を挙げているような孤独癖を指摘できる。

また、谷崎は女性に対する憧れが極めて強かつたにもかかわらず、現実の女性と恋愛関係を持つ事が極めて困難だったという事実も挙げられる。例えば『父となりて』・昭和六年一月二十日付け古川丁未子宛潤一郎書簡、および創作の中（『前科者』『金と銀』『富美子の足』『黒白』など）で、本当の恋愛を経験した事がない事、女を恋しているように見える時にも、実際にはその女の中に自分勝手な幻影を見ているだけである事が語ら

れている。谷崎の恋愛は、相手に自分の理想のイメージを投影する極めて自閉的なものであり、また、しばしば相手を自己の理想の分身視している点から言うと、ナルチシズムの段階に留まるものと言えるのである。

『当世鹿もどき』などで言う谷崎のはにかみ癖も、乳幼児期に、世界および他者に対する基本的信頼感が充分確立されなかった事に起因するものであろう。

(三) 他者への攻撃

ウイニコットは、非行少年の反社会的行動は、一、二歳時の母性喪失に対する反応であると説いているが、谷崎にも、母・乳母のほか、母を潤一郎から奪ったと考えられる父や弟、男性全体、ひいてはそうした不当な迫害を容認している社会・世界全体に恨みを抱き、攻撃する傾向が見られる。また、男性的・男根的価値観自体を攻撃する傾向もある。例えば、女性的男性・弱い男・幫間・少年・老人などを高く評価し、男らしい強い男を評価しない傾向や、女性に高い鼻を与え、男性の鼻を攻撃する傾向など(『アエ・マリア』『腕角力』『武州公秘話』)。

谷崎が幼少期に暴力的であったり、親不孝であった事は先に見た。また、高等小学校から中学時代にかけて、潤一郎は稲葉

清吉先生の影響を受けて、禁欲的な聖人君子・宗教家・哲学者たらんとしていたが、これは一面から言えば、先述の通りベシミズムの現われである。しかし、ルターや日蓮など、攻撃的な指導者を理想的人物と考えていた事(M35『時代と聖人』『日蓮上人』)からも判るように、そこには精神的に世界を征服したいという極めて攻撃的な野望が隠されていた。

さらに、精養軒の書生になってからは、自らの貧苦を不当な迫害と感じ、富者を妬み憎む所から、谷崎は次第に社会に対する敵意を強める。『歳末に臨んで聊学友諸君に告ぐ』(M36『学友会雑誌』)では、『他日社会に立ちて天下の輿論に抗し(中略)社会を敵として論難せんと欲するものは乞ふ我が論説欄に於て其論を主張せよ』と呼び掛けているし、『文芸と道徳主義』(M37)では『個人主義の叛逆』『本能意志の満足を主張して現代文明の大破壊を企てたる』ニーチェらの『現代文明に対する大なる憎悪の念』『社会の偽善者に対する呪咀復讐の心』に共感するとし、新体詩『述懐』(同年)では『歌をしよまば世の人の罪をばとはにならずべく／文をしかかばいつはりの世とたたかはむ』と言い、『死火山』(M40)では、『世をのろひ他人をにくむおもひ胸に凝りて(中略)我につらき、われをさげすむ世の人に復讐せんす一念の外、愛もなく歌もなく、黙々と

して日々書籍にむかひぬ」と書いている。

こうした傾向は、作家デビューを果たした後も基本的に変わらなかつた。『刺青』には特にその事が象徴的に現われている。

清吉はもともと攻撃的な性格で、男たちを屈服させる事に快感を抱いていた。彼が刺青を施す事によって生み出した女も、彼の愛欲を満たす対象ではなく、最初から社会全体を攻撃する事が目的の最終兵器と言つてよい。清吉は、刺青の魔力によって彼女に乗り移り、社会に報復しようとしているのである。

後の『創造』もまた、社会に害毒を流す絶世の男女両性具有的美男子を作り出す話であるし、『人面疽』では、愛して貰えなかつた恨みから、乞食が人面疽に生まれ変わって、相手の女だけでなく、その女を通じて社会にも復讐する。

谷崎文学には、反社会的な悪女が多数登場するが、それらは単に谷崎のマゾヒズムから要請されるだけでなく、谷崎の社会に対する秘められた敵意を代行する為にも必要だったのである。彼女たちが、概して幼稚でナルチスティックでエゴイスティックであるのも、谷崎自身の無意識の願望を投影した分身だからであろう。

もとより、悪を復讐する事には、社会が抑圧・排除していた悪のエネルギーを善用し、硬直した既成の価値秩序をより柔軟

で豊かなものへ解体・再編成するという文化的意義があり、だからこそ悪の芸術が成り立つのだが、谷崎の場合、上記の如き心理的背景があつた事は見逃せない。

一方、谷崎の小説の男性主人公には、ヒロインほど悪性が目立たないが、初期には自称悪人・天才（『神童』）異端者の悲しみ（『金と銀』）・強者たらんとする者（『捨てられるまで』）『鬼の面』など）・強がる者（『彼女の夫』）『愛なき人々』『神と人との間』など、攻撃性やナルチズム・エゴイズムの目立つ人物が多く見られる。

谷崎はまた、家族というものに対する攻撃性も示していて、実生活でも常識的な夫婦関係や親子関係を拒否している（『父となりて』『雪後庵夜話』など）。作品でも、通常の夫婦愛や家族愛を描く事は殆どない（『細雪』は例外に見えるが、松子の姉妹愛が描かれているだけで、潤一郎の家族愛とは言えない）。『蘆刈』では姉が妹の夫に、『鍵』では母が娘の婚約者に、『癡癪老人日記』では父が息子の嫁に手を出すという反家族的行動に出る。『夢の浮橋』では妻を息子に譲渡し、『蘆刈』『春琴抄』『少将滋幹の母』『夢の浮橋』では母が子供を捨てるし、『痴人の愛』『春琴抄』では生家を捨てる。その他、多くの作品で、夫は妻をないがしろにし、他に恋人を求めている。これらはも

とより、家族という制度が、谷崎のインセスト的な性欲に対して禁止的に働く為でもあるが、谷崎が父母に対して恨みを抱いていた事とも無関係ではあるまい。谷崎が、自身の墓を父母とは別に作り、母と一緒に眠ろうとはしなかった事にも注意すべきであろう。

この他、男性主人公の悪の種類としては、金を借りて返さない例が非常に多い事が注目し値する（『The Affair of Two Watches』「村間」『春の海辺』『饒太郎』『鬼の面』『異端者の悲しみ』『或る男の半日』『前科者』『金と銀』『鮫人』『私』『AとBの話』『愛すればこそ』『神と人との間』『痴人の愛』『金を借りて来た男』『黒白』『AとBの話』『黒白』など。盗み癖のある女に心を惹かれるという例（『饒太郎』『瘋癲老人日記』）もある。実生活に於いても、潤一郎は金を盗むような女中を喜んで採用したという話があるし、彼自身、若い頃には、友人から借りた外套などを返さなかつたり、借金を踏み倒したという話も多い。

こうした心理を理解する上で参考になるのは、必要がなくても盗んでしまう強迫的な盗み癖（Kleptomanie）の心理である。福島章氏の『犯罪心理学入門』によれば、これは乳児期に母の愛に恵まれなかった人間に現われ、盗品は母乳や母の愛の象徴

になっており、窃盗者は、本来自分に与えられる筈のものが間違つて他人の所にあるので取り返すだけだと感じている、と言う。

谷崎の小説『私』の主人公は、まさにこの種の窃盗常習者である。また、自分は不当に不幸（孤独）にさせられていると感じて復讐する『悪魔』『兄弟』『AとBの話』『或る罪の動機』『お国と五平』なども、類似の心理と考えられる。

例えば『兄弟』の兼通は、『幼い折から妙に陰鬱で、片意地で、可愛がられない少年』であり、人に愛され自分より出世する弟・兼家に対して、激しい復讐を行う。

また、『AとBの話』では、愛にも財産にも芸術的才能にも恵まれているAに対して、Bは、「Aがあんな幸福を授かつてそれを正しい報酬のように思っているのは不公平だ。Aの幸福を出来るだけむしり取ってやろう。それで差し引き勘定が付く」と考え、Aの創作をBの名で発表する事を要求し、「そうすれば君は不当に虐げられている事を感じるだろう。その孤独な感じが僕ら悪人の常に味わっている心持ちだ」と言う。

『或る罪の動機』では、世の中を非常に淋しく味気なく感じている孤児の主人公が、今までの不公平を多少取り除く為に、偶然の幸福を必然の報酬のように思っている幸福そのものの立

派な博士を殺してしまふ。

『お国と五平』では、不運にも女々しい男に生まれ付いてしまった池田友之丞が、お国との婚約を破棄され、しかも誰も其の毒と言ってくれない淋しさ故に、世の中に盾突く氣で、お国の夫・伊織を闇討ちにする。

女性主人公になるが、『不幸な母の話』の母は、海で遭難した際、息子がとっさに母を突きつけ、嫁を救った事を恨み許さず、遂に息子を自殺へ追いやってしまふ。

これらの作品からはつきり見て取れるのは、谷崎自身が、自分は不正に幸福を奪われ盗まれた、だから、自分には他人の幸福を傷付けて復讐したり、他人から幸福を暴力的に取り返す権利がある、と感じていた事である。

谷崎の大正期の作品には、芸術的天才には悪事を働いても許される特権が与えられているという感覚が時折顔を出す(『神童』『鬼の面』『異端者の悲しみ』『金と銀』『呪はれた戯曲』)、これも同様の心理に、芸術という言い訳を添えたものと言えるだろう。

谷崎にはエディプス・コンプレックスがあるが、エディプス・コンプレックス自体も、早期の母性喪失を、父に盗まれた結果と見なすことから発生するものと言えよう。その事は、命名

のもとになったオイディプスが、乳児期に父母に捨てられ、のちに王位と母を父から奪い取っていることから明らかである。

この様な母性喪失に対する報復の心理は、他の作家たち、中でも初期のロマン主義者には、しばしば見られるようである。例えば弟に父の愛と恋人を奪われて盗賊団の首領となるシラーの『群盗』や、人に裏切られ欺かれて遂に海賊となるバイロンの『海賊』(バイロンの母はヒステリーで、バイロンの片脚を不具にしたのもこの母であると言う)、叔父に父を殺され、母と王位を奪奪され、報復するシェークスピアの『ハムレット』、愛する宮を資産家に奪われ、高利貸となって社会全体に報復しようとする尾崎紅葉の『金色夜叉』(紅葉は早く母を失っている)、親友に裏切られ、婚約者まで奪われた結果、神さえ呪う世捨て人となり、金を蓄えることだけを目的に生きるジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』、そして泥棒詩人のヴィヨン、ジャン・ジュネや、掏摸に好意を持つ泉鏡花などがある。

シラーは『群盗』で、フランス革命政府から名譽市民の称号を与えられたが、これは、フランス革命自体が、不当に恵まれないと感じている大衆の欠損感から発生しているからである。

う。ロビン・フッドや鼠小僧などの義賊に人気があるのも、同じ理由からと考えられる。

また、復讐の鬼となる人物（デニマの『モンテ・クリスト伯』・ブロンテ『嵐が丘』のヒースクリフ・メルヴィル『白鯨』のエイハブ船長）や社会から心を閉ざして孤立する人物（ヴェルヌ『海底二万マイル』のネモ船長）なども、報復のヴァリエーションと言える。

エゴイズムのない愛を得られなかった芥川龍之介が、『羅生門』で盗賊に変身し、継母に育てられた中島敦が、『山月記』で『誰にも傷つきやすい内心を理解して貰えなかった』李徴の虎への変身を描くのも、同様に考えられる。母子関係に問題の多かった夏目漱石に、財産（『虞美人草』『こゝろ』など）や女性（『坊っちゃん』『三四郎』『それから』『門』『こゝろ』『明暗』など）を取る・取られる話や、社会から心を閉ざす人物の例（『坑夫』『こゝろ』『行人』）が多いのは、当然であろう。

ところで、谷崎の場合には、こうした心理の裏返しとして、自分が成功し、幸福を得た時には、今度は誰かがそれを不当なものとして取り返しに来るのではないかと不安に感ずる傾向があったようである。この不安は、『悪魔』『金と銀』『少年の勢迫』『痴人の愛』『マンドリンを弾く男』『黒白』『乱菊物語』『少

将滋幹の母』『鍵』などに現われている。これらの作品で、攻撃して来るのが、主人公の身分的な人物や、影のようにはっきりしない、薄気味悪い存在であるのは、それが谷崎自身の内なる攻撃性の投影だからであろう。

なお、他人のものを本当は自分のものであるように感じたり、自分のものを簡単に他人に取られそうに感じたりするのは、一つには、自他の境界線が曖昧な乳児的な精神構造の現われでもある。

（四）捨てられ不安

乳児期以来、母に捨てられたと感じていた谷崎にはまた、母ないしは理想の女性から捨てられるという不安が強く、その事は種々の形で現われている。

例えば、谷崎の作品には、恋人に裏切られたり捨てられたりする話が多い。これは、精神分析学で言う「反復強迫」に当たり、母に捨てられた体験を反復しているのである。

また、谷崎が理想の女性と出会った場合には、相手が理想的に見えれば見える程、母の時のように、また自分は捨てられるのではないかという不安が募ったようである。実生活で言えば、松子との結婚をかなり長い間ためらっていたのはその為である

う。また、千代子との離婚後、女中との結婚を考えたり、女中と結婚する話を『吉野葛』で書いたり、丁未子と結婚したりした事も、三回の結婚相手がすべて潤一郎より十歳以上年下の女性である事も、自分より弱い、捨てられにくい女性を選ぼうとした結果であろう。

創作においても、『痴人の愛』の浪治などには、大人の女性を恐れる傾向がはっきり見て取れるし、谷崎のヒロインには、十代後半の女性が多く、そうでなくても幼児的性情の持ち主が多い。

また、女性の側にハンディーを与えて、主人公が優位に立てるようにしているケース（『痴人の愛』のナオミの出自の卑しさ・『アエ・マリア』のソフィアの不具、春琴の盲目および顔の破壊など）や、ヒロインを落魄流浪させるという形で弱めるケースも多い。母恋いものでも、『母を恋ふる記』の母は鳥追い女という被差別者・貧民、『吉野葛』の母はもと遊女で一種の狐、『少将滋幹の母』は夫と子供を捨てて権力者になびいた裏切り者・浮気者で、尼になってから再会する、『夢の浮橋』の経子はもと祇園の舞妓で賤の母、と、いずれの場合も、実際の母セキにはなかった負の要素が付け加えられている。また、当初善良だったヒロインを、主人公が次第に悪人に変えて行く

『痴人の愛』『鍵』のようなケースも、ヒロインとの距離を縮め、捨てられ不安を緩和するものであろう。

また、小田原事件のように、実生活に於いて実際に女性に捨てられそうになった際には、母に捨てられるというかつての不安が強く再燃し、それが事件を複雑なものにする一因になったと考えられる。

そもそも谷崎が千代子を母と同一視していた事については、次のような傍証がある。

まず、『十五夜物語』（T6）や『肉塊』（T12）では、母が自分の死後は嫁（非千代子）を母と思えと遺言する事になっている。また、『嘆きの門』（T7）では、前妻（非千代子）の死に方が、セキの死に方とそっくりに描かれている。『鴉嘆』（T10）および『友田と松永の話』（T15）では、母の死と同時に妻とうまく行かなくなるという設定が成されているが、これは母の死後、妻を母と同一視する為に、インセスト・タブーが働くようになった為と推定される。この点については、『佐藤春夫に与へて過去半生を語る書』の中で、千代子との間で《夫婦関係》（性生活）が全くうまく行かなかつた事が告白されている事によっても裏書きされる。母の死の直後にせい子と肉体関係を生じたのも、千代子に代わる性対象が必要になった為であ

らう。

福島章氏の『犯罪心理学入門』によれば、母に甘えさせて貰えなかった人間は、その代償を恋人や妻に求め、それが得られないと、激しい怒りを爆発させる事があり、これを「転移性攻撃」と言う。谷崎が、千代子を一時期、虐待していた事は有名だが、恐らくそれは、千代子が松子と違って従順な妻たらんとし、谷崎の理想とする強い母を演じる事が出来なかつた為に引き起こされた「転移性攻撃」だったのであろう。

谷崎が千代子と離婚するまでに十五年もの歳月を要したのも、一つには、千代子を一種の母として愛していたからであり、離婚する事が、谷崎には、母を捨て、母に捨てられる事に等しいと無意識の裡に感じ取られていたからであらう。『佐藤春夫に与へて過去半生を語る書』には、『別れることを長いあひだ躊躇した』理由の一つとして、『千代子から僕と云ふものが忘れられるのが淋しかつた』事と、再婚後の千代子が不幸になる事を恐れた事を挙げてゐる。前者は捨てられ不安、後者は母を捨てて不安と理解される。

小田原事件で谷崎が千代子を佐藤春夫に譲渡しようとしたのも、捨てるのではなく、千代子を《何んとかして幸福にしてやりたい》と思つたからであり、それが《ひたすら彼女を追ひ出

しにかかつてゐるやうに解されてゐるのを発見した》時、潤一郎は譲渡話を撤回したのである。

潤一郎は、『彼女に憎まれて別れたくはないのだ。別れた後（中略）君を見ること僕の如く（中略）君の中に僕と云ふものがあると思つて欲しかつた』。ただ、その真意を隠し、『わざと彼女を邪魔にするやうな態度を取』り、真意は佐藤が『陰へ廻つて彼女に話してくれるものと期待してゐた』と言う。要は、離婚後も佐藤と谷崎が一緒に千代子を愛し、千代子も佐藤と谷崎を同じように愛し続け、佐藤と谷崎は親友であり続ける、という風にしたかったのであろう。

ところが、千代子も佐藤も、谷崎が千代子を嫌つて佐藤に押し付けようとしてゐると受け取り、二人の関係が恋愛へと進むにつれて、潤一郎は妻も友人も失い、一人ぼっちにされるといふ情勢になつて来た。その時の気持は、『神と人との間』で、妻に逃げられた瞬間の添田（非谷崎）の気持が、『独りぼつちにさせられた！』《此れがほんたうの孤独なのだ》《子供だつたら、わあッと大きな声を揚げて泣いたに違ひない》と描かれてゐるやうに、母に捨てられた幼児の心境だったのであろう。添田が最後に穂積（非佐藤）に向かつて、『僕は朝子を、君のものを取つていたんだ、悪いと知りつつ、そうしなけりやあ淋し

かったもんだから」と告白している事も、捨てられ不安の再燃が、譲渡撤回の原因だった事を裏書きしている（と共に、「Kleptomane」の心理との関連も窺える）。

小田原事件直後、数年間の谷崎の作品には、再燃した捨てられ不安の現われと解釈できる現象が、数多く見られる。

例えば、捨てられ不安を打ち消す為に、悪人（谷崎）を無限に許し、決して捨てない母としての千代子の話を次々と書いていく事（T10に『AとBの話』『或る調書の二節』『愛すればこそ』、T11に『彼女の夫』、T12に『愛なき人々』、T13に『無明と愛染』）。また、西洋の慈悲深い母たる聖母マリア像を、母恋いの起源に据えたり（T12『アエ・マリア』『肉塊』）、聖母に言及する事（T10『生れた家』、T12と3『神と人との間』）。また、淋しい心の持ち主を描いたり、捨てられ不安を攻撃性に転化して、不当に不幸にされた事に復讐する作品を次々と書いていく事（T10に『不幸な母の話』『私』『AとBの話』、T11に『或る罪の動機』『お国と五平』、T12に『肉塊』。T13と4の『痴人の愛』も、捨てられ不安に関係があろう）。

また、幼少期の淋しさと不安を思い出して書いたり（T10『生れた家』、T12『アエ・マリア』の人形遊び）、母を理想化して、（一番崇高な感じ）がする女性は母だと語った『女の顔』（T

11）を書いている事、などがそれである。

実生活に於ける捨てられ体験に対する反応としては、小田原事件以前にも、セキの死に対する『晩春日記』『十五夜物語』『ハッサン・カンの妖術』『二人の雀見』などがあり、父の死に際しては、母の死を思い出し、父ならぬ『母を恋ふる記』を書いている。

小田原事件以降では、千代子と和田六郎の恋愛事件に対する反応として書かれた『夢喰ふ蟲』の場合、美佐子（千代子）を阿曾（和田六郎）に譲った後の代わりの母として、「お久」タイプを見出したことで、捨てられ不安が抑えられ、離婚が可能になる、と解釈できる。

また、千代子との離婚が成立した昭和五年八月には、『乱菊物語』の末尾として、赤松政村が、失った母と同一視していた胡蝶を奪われる事を書き、その直後に、失われた母を回復する『吉野葛』を書いている。そして、次々と再婚相手を物色し（偕楽園女中某・萩原朔太郎の妹など）、異常なまでに急いで次の再婚相手を決めていく。これらも捨てられ不安を一刻も早く解消する必要からであらう。

松子との恋愛時代には、捨てられ不安がなくなりそうだが、『盲目物語』『武州公秘話』『蘆刈』『顔世』『聞書抄』など、却

って別離ないし不幸に終わるものはかり書いてある。これは、松子を崇拜する余り、自分は松子に値しない存在で、捨てられるのではないかという不安が生じた為であろう。潤一郎の松子に対する畏怖と劣等感がいかに強かったかは、松子をモデルとした女性がすべて身分違いの高貴な美女として仰ぎ見られている事や、『春琴抄』で、春琴が当初、佐助との結婚を断然拒否し、春琴の顔が破壊されて初めて真の夫婦になれる事、また、実生活でも、潤一郎が松子の下男として振る舞おうとした事、などから知る事が出来る。

潤一郎は、子供の頃、財産を失った倉五郎が母に恨み言を言われるのを聞いて育った。その事が、豊かな生活が出来ない男は母に捨てられるという考えを植え付けたのであろう。『蘆刈』や『少将滋幹の母』でも、ヒロインは金持の手に渡るのが当然とされている。千代子と別れた頃から、谷崎が貧乏に苦しんでいた事は、松子との結婚をためらったり、捨てられ不安が消えなかった事の一因にもなっているだろう。

その後の作品も、『猫と庄造と二人のをんな』は、可愛がっていた猫のチュウの老化に対する反応（執筆中に死亡）、『細雪』は重子・信子が結婚して離れ行く事に対する反応として書かれたものである。

戦後の作品群には、殆どすべてインポテンツが取り上げられており、戦後、老人性インポテンツに陥った谷崎が、捨てられ不安を再燃させた事との関連性が認められる。

以上、駆け足で見えて来たが、谷崎の文学および実生活に現われた種々の徴表から見る限り、潤一郎の無意識には、自分は母に愛されなかったという印象が深く刻み付けられていたとしか考えられない。また、そう考えて初めて、これまで充分に理解も評価もされて来なかった一群の作品の意味や、小田原事件の謎など、種々の問題が解明できる。

また、谷崎以外の作家たちについても、同様の心理的解明が可能な場合が少なくないと、私は考えているのである。

〔注〕

(1) 早期の母子関係に問題のあった夏目漱石にも、同様の暴力的傾向があった事は、『道草』から窺える。

(2) この人形のエピソードは、概ね事実通りと私は見ている。『アエ・マリア』には、『八犬伝』の芝居を見て以来、白い人形を鼻根にするようになったとあるが、これも

明治二十六年一月、市村座の「犬莊子嘔懷」と推定できる。

(3) 特に大正五年頃までは、男根的な自己確立への志向が顕著であり、だから、自伝的な作品(『饒太郎』『神童』『鬼の面』『異端者の悲しみ』など)や、自分の考えを登場人物に直接語らせる作品(『金色の死』『創造』など)、告白『父となりて』など、自分とは誰かを明確にしようとする作品を多く書き、自分独自の芸術論も、大正二年から四年にかけて、書こうとしていたのだと思われる。自らを悪人と規定しようとしたことも、一面から言えば、自己確立の方法の一つだったと言える。

(4) その作業が、母の死後、そして父の死の直前に始まるのは、父母の死によって、恨みとインセスト・タブーがかなり弱められた為であろう。

(5) 坂口安吾・三島由紀夫などに見られる不感症的で冷酷な理想女性も、安吾の母・三島の祖母を理想化したものである。

(6) ボードレールが猫や悪女を愛し、『ヴィーナスとフルール』で理想女性を彫像で表わしている事は、谷崎の共感を呼んだようだが、ボードレールもまた母に裏切られた人間

だった事に注意すべきである。

(7) 谷崎には、明るく享樂的で、丸々と肥え太っているというイメージがあるが、実際には作家デビニー頃まではノイローゼ的で瘦せており(『青春物語』)、大正時代には、『友田と松永の話』のように、太ったり瘦せたりを繰り返していた(『円地文子との対談』『芸術よもやま話』S39)。これらは、谷崎の中に厭世的傾向が強くなって、それを克服しようとする楽天的志向との間で強い葛藤を生じていた事を示すものであろう。

(8) 谷崎は、高等小学校時代に幸田露伴の『二日物語』を暗唱するくらい繰り返し読んだというが、この作品の中の崇徳院は、怨念によって全世界の破壊を目指すバイロンの・悪魔的な存在として迫力を持って描き出されている。そこに谷崎は共感したのであろう。

(9) 尾崎紅葉の『伽羅枕』や樋口一葉の『にこりえ』に、反社会的な娼婦が登場するのも、作者の社会に対する攻撃性の現われであろう。

(10) ロマン主義以降の芸術家の多くが、幼少時代に抱いた父母への何らかの不満から作品を生み出し、悪を復讐している。古い秩序を破壊し、進歩を目指す近代芸術には、

幼少時代に根を持った攻撃性と悪の復権が必要だからであらう。

(11) 金持を泥棒祝するものには、ブルードンの『貧困の哲学』や、フレヒトの『三文小説』などがあり、漱石にもそういう感覚がある。

(12) 分身のイメーシは、もともと母の愛を争う父や兄弟のヴァリエーションと考えられる。谷崎の場合も、父や弟に母の愛を奪われたという感覚が発点にある。

(13) ラディゲの『危険な関係』やサドの作品など、一般にサディズムには、この種の心理が深く関係しているように思う。